

論 文

『賦光源氏物語詩』を読む（十三）

——手習・夢浮橋・賦物語作者紫式部・補記——

本 間 洋 一

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

Reading the “Fu Hikaru Genji Monogatari Shi” (thirteen)

——Tenarai · Yumeukihashi · Fumonogatari Sakusha Murasakishikibu · Hoki——

Yoichi Honma

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor**Abstract**

This is the final round of the first Japanese commentary on the work that I wrote the world of “*Genjimonogatari*” in Chinese poetry. “*Tenarai*” “*Yumeukihashi*” accompanied by the volume and accompanying “*Murasakishikibu*” in the text of the song, reading and interpretation, part of the vocabulary and expression discussed in detail, “*Hosetsu*” consists. In the “*Hosetsu*” received a preliminary research, put forward the interpretation of the preface, and mention the rhyming system. It was thought that this was caused by the lost rhyming system of Tang dynasty (based on the “*Setsuin*” -based verse and based on *Hyosho 32 In* integrated), and that we should reexamine the significance of that morning. In addition, I also wrote my personal opinion about the character of this book.

(要旨)

『源氏物語』の世界を漢詩に詠んだ作品の本邦初の注解稿の最終回。「手習」「夢浮橋」の巻と添えられた「紫式部」を称えた詠の本文に、訓読文・解釈を施し、語彙や表現について詳しく論じた部分と、「補説」から成る。「補説」では先行研究を受けて序文の通釈を掲げ、押韻の体系に言及。失われた唐代の押韻体系(『切韻』系韻書を基本とし、平声三十二韻に統合されたものを用いる)によるものと考え、その本朝に残された意義を改めて見直すべきだと説いた。また、本書の性格の一端についても私見を述べている。

五十四 手習

山家草樹此棲勝 山家の草樹 此の棲勝る
寂寞松門月下排 寂寞たる松門 月下に排く
心信法華修仏道 心は法華を信じて 仏道を修む
身同朽木送生涯 身は朽木に同じく 生涯を送らんとす
溪流声絶水空閑 溪流声絶えて 水空しく閑づ
巖径跡稀雪幾埋 巖径跡稀にして 雪幾はくか埋む
対鏡看形顛頓尽 鏡に對ひて形を看れば 顛頓し尽き
閑中手習僅據懷 閑中の手習に 僅かに懷ひを據ぶるのみ
(七律。排・涯・埋・懷(上平声佳韻))

卷名は末句に詠込まれている。横川の僧都の母と妹が願かけに初瀬詣した帰途、母が病み、知人の宇治の家(故朱雀院の御領の宇治院)に身を寄せることとなり、かけつけた僧都が下見に出向く。すると、邸内の大木の根元に激しく泣く女を発見。知らせを受けた妹の尼君は彼女を介抱し、亡き娘の代わりと思い世話をする。母の尼君が小康を得て、一行は比叡坂本の小野の住居に戻る。人事不省の女の身の上をあれこれ臆測すると共に、療治に困惑する妹尼は、兄の僧都に加持祈禱を依頼。彼は美しく清らかな女に改めて驚きつつも、物怪を調伏し

た。彼女が意識を回復し、記憶を辿り、あの浮舟であることが明らかとなるが、彼女は出家を願って五戒を受け、半生を返るのであった。そんな折、妹の尼君の亡き娘の夫の中将が横川を訪れる途次訪問する。尼君は喜びもてますが、彼は目敏く浮舟を発見し心を動かす。更に僧都にも会って事の子細を聞き、帰途小野に立寄り彼女に歌を贈る。彼はその後も訪れ、尼君の勧めもあるものの、彼女は誰にも見られることのない、忘れられた存在でありたいと臥せているのだった。中将が笛、尼君が琴を奏し、大尼君も感に堪えかね、和琴を弾く一方で、浮舟は経を習い仏に祈るばかりである。尼君は初瀬へ御礼詣に出かけ、浮舟は気分すぐれず居残り、少将の尼と基で気晴らしをしている。すると、月下に中将が訪れ歌を詠みかける。だが、彼女は大尼君のもとに避けて臥せり、眠れぬまま思いに沈むのであった。時に女一の宮(匂宮の妻)が病み、その修法奉仕に下山した僧都に願って、浮舟は受戒し尼姿となった。彼女は手習いに歌を詠み、書くなどして日々を過ごし、心の区切りもついたので、中将との歌の贈答もしている。だが、帰宅した妹の尼君は落胆を隠せない。女一の宮の病は僧都により平癒し、彼が宇治の女のことを語ると、それを女一の宮に仕えていた宰相の君が聞きつける。一方、心を入れ経を読み精進している浮舟の姿に、中将と尼君は各々の思惑で話を交わすのだった。年明けて、大尼君の孫の紀伊守が小野の家を訪れ、仕えている薫や彼の通っていた故人の宮の娘のことなどを詳しく語る。それを側聞した浮舟は切ない思いに駆られ、母(中将の君)を思ったりして涙する。浮舟一周忌も過ぎ、薫は宰相の君から浮舟の情報を得て驚き、僧都を訪れ、浮舟と再会すべく行動するのだった。以上が当巻の概略だが、次に聯毎に訳を記してみよう。

(小野の) 山里の家は草木も(趣深く) 生え、住居として勝れた
処なのでございまして、ひっそりと物淋しい(小野の里の) 松の
植えられたその門は、月下に押し開かれていたのでございまして。

(浮舟様はその家で) 心を入れて『法華經』を誦讀なさり仏道に精進しておられたのでございます。そして、ご自身は朽ちはてた木に等しく(この世の未練を断ち切って) 一生を送るつもりでいらしたのでございました。

谷川の水音もせず、氷にただ閉ざされる(ような小野の山里の) たたずまいでございまして、岩山道を通う人も稀で、雪でどれ程埋もれるところでございましたでしょう。

鏡に照らして容貌に見入りましたなら、すっかりやつれた(こと)をお知りになった) ことでしょうけれど、(浮舟様は勤行の) 隙に(慰めの) 手習いなどなさり、ささやかな御自身の思いなど(歌に) したためなさるのでございました。

首聯は次のように見える小野の住居の記述を背景としている。

昔の山里(宇治)よりは水の音もなごやかなり。造りざまゆゑある所の、木立おもしろく、前栽などもをかしく、ゆゑを尽くしたり。秋になりゆけば、空のけしきもあはれなるを、門田の稲刈るとて、所につけたるものまねびしつと、若き女どもは歌うたひ興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかし。見し東国路のことなども思ひ出でられて。かの夕霧の御息所のおはせし山里よりはいますこし入りて、山に片かけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづれに行ひをのみしつと、いつともなくしめやかなり。(③01頁1〜13行)

「山家」は小野の山里の家。「垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗」(③05頁2〜3行)や「紅梅」(③56頁1行)も咲き、趣向を凝らしていることが知られる。「疎散郡丞同三野客」、幽閑官舎抵「山家」(「北亭招客」『白氏文集』卷一八)「従属金商興有餘、山家尋訪閑居」(中原広俊「山家秋意」『本朝無題詩』卷七・452)はその和漢の語例。「草樹」は草木。「江亭乘暁閑衆芳、春妍景麗草樹光」(「江亭翫春」『白氏文集』卷一九)「榭樓皆白玉、草樹総花梅」

(大枝水野「詠雪」『経国集』卷一三) 他よく見える語。「寂寞」は物淋しく静かな様。「寂寞深村夜、残雁雪中聞」(「村雪夜坐」『白氏文集』卷六)「寂寞山家秋晚暉、門前紅葉掃人稀」(紀長谷雄「山家秋歌八首」其八『本朝文粹』卷一・29)等、白詩や王朝詩に用例も多い。「松門」は松の植えられた(家の)門。ここは、僧都が女の宮の病の療治に下山して帰山する途中、小野の家に立寄る次の場面も想起させる。「…かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも恥づかしくも思すべき。このあらん命は、葉の薄きが如し」と言ひ知らせて、(僧都)「松門に暁到りて月徘徊す」と、法師なれど、いとよししく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも言ひ聞かせたまふかなと聞きあたり。(③48頁14行〜349頁3行)

白詩「陵園妾」(『白氏文集』卷四)の「顔色如花命如葉、命如葉薄・将奈何、青糸髮落叢鬢疎、紅玉膚銷繫裙縵、憶昔宮中被妬猜、因讒得罪配陵來、山宮一鎖無開日、未死此身不合出、松門到暁月徘徊、柏城尽日風蕭瑟」をふまえることと言うまでもない(古注参照。猶、新聞一美「新樂府「陵園妾」と源氏物語」『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、平成十五年、参照)。「月下排」は白詩の「山宮一鎖無開日」を意識して恐らく綴られており、山宮(陵園の居)とこの小野の山家は違つて、後者は閉ざされた世界ではないという含意の表われであろう。ただ心を鎖し自らの意志で籠居する浮舟は陵園の妾に重ねられるかのようである。松門は本来陵園の門のだが、ここでは山家の門なのだ。記す迄もなく、「月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつとさまさまの物語などする」(③02頁12〜13行)のであるが、月をながめる歌の贈答(妹の尼君と中将。③38頁9〜14行)もあり、九月の頃の「月さし出でてをかしきほど」(③27頁3行)に中将が訪れる、と言うように尼君達の山家は物淋しい所ではあるが、決して外部に対し鎖されてはいない。

頷聯は、浮舟が仏道に勤めている場面、例えば、
 …行ひなどをしたまふも、なほ数珠は近き几帳にうち懸けて、経
 に心を入れて讀みたまへるさま、絵にも描かまほし。

(⑥351頁4～5行)

思ひ寄らずあさましきこともありし身なれば、いと疎まし。すべ
 て朽木などのやうにて、人に見棄てられてやみなむともてなした
 まふ。されば、月ごろにたゆみなくむすほほれ、ものをのみ思し
 たりしも…行ひもいとよくして、法華経はさらなり、こと法文な
 ども、いと多く讀みたまふ。(⑥354頁4～10行)

あたりを背景として思われる。「朽木」は腐った木の意で、「宰
 予昼寝。子曰、朽木不可雕」(『論語』公冶長)「使布衣之士不
 得為枯木朽株之資也」(鄒陽「於獄上書自明」『文選』卷三九)「翰
 苑為單擘、詞林作朽株」(藤原敦光「初冬述懷百韻」『本朝統文粹』
 卷一)のように、役立たずや老人の比喩として用いられることが多い。
 猶、「徒送生涯無所所作、罪障難尽涙先紅」(藤原忠通「遊山寺」
 『本朝無題詩』卷一〇・713)は「送生涯」の一例。
 頸聯も小野の山家の様子を描いたもので、

年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音もせぬさ
 へ心細くて…。(⑥354頁13～14行)

とあるところや、それに続く「かきくらす野山の雪」(⑥355頁2行)「山
 里の雪間」(同上8行)「雪ふかき野辺の」(同上11行)などといった
 和歌を意識して詩句を成したものだろう。山家は「比叡坂本に、小野
 といふ所」(⑥290頁13行)に在ったというから、現在の八瀬あたり、
 高野川に沿う地ということになるか。「溪流」や「巖径」(岩山道)と
 表現されるのももつともなことである。「溪流一曲尽、山路九峰長」(孫
 逖「尋龍瑞」)「溪門税駕応尋艶、巖径卜居為饒勾」(菅原定
 義「依花口愛山」『類聚句題抄』105)はその語例。「不醉争辞温樹下、
 建春門外雪埋春」(三善清行「元日賜宴」『新撰朗詠集』卷上・早春

9)は「雪埋」の例。「水閉」は「冰封」(封の訓「トヅ」、又「水結」
 「水合」の意に同じ。氷が融けることを「氷開」と表現することも思
 い合わされよう。

尾聯の第七句は、浮舟が衰弱し、「生くまじき人にや」(⑥291頁15行)

「久しうわづらふ人」(⑥293頁1～2行)など見え、しばしば臥せつ
 ている様子も窺えることから詠まれたものであろう。現在の物語文中
 には鏡を手に自らを照らし見る浮舟の姿はない。また、第八句は、浮
 舟が手習いに和歌を作り、思いを書きつけていることが幾度も記され
 るが、それを意識した表現である。代表的なところを挙げておくこと
 としよう。

ただ硯に向かひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことに
 て書きつけたまふ。

(浮舟)「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに
 棄てつる

今は、かくて、限りつるぞかし」と書きても、なほ、みづからい
 とあはれと見たまふ。

(浮舟)限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬ
 るかな (⑥341頁2～9行)

「対鏡」は鏡に向かい見ること。「閑看三明鏡、坐三清晨、多病姿容半
 老身」(「対鏡吟」『白氏文集』卷一七)「対鏡容華改、調琴怨曲催」
 (嵯峨天皇「長門怨」『文華秀麗集』卷中)などを挙げるまでもなく、
 大抵は老いや衰えを見出すことになる。「形」は顔かたち、姿。形容・
 形貌のこと。「顛顛」は憔悴に同じく、やつれ衰えること。「常嗟薄命
 形顛顛、若比弘貞是幸人」(「見楊弘貞詩賦」…)『白氏文集』卷一
 五)「愁苦辛勤顛顛尽、如今却似画图中」(「王昭君」『和漢朗詠集』
 卷下・王昭君697)『白氏文集』卷一四)「強対鏡台、試弘塵、影中唯
 見憔悴人」(小野岑守「奉和聖製春女怨」『凌雲集』)などはその例。
 「手習」は和習語。「攄懷」は思いを述べる意。「攄懷旧之蓄念、

発「思古之幽情」(班固「西都賦」)「文選」卷一「至人據^レ思、製
為^二雅琴^一」(嵇康「琴賦」同上卷一八)「玄陰云暮俱談話、僧舍^レ炉
思自據」(藤原周光「歳暮述懷」)『本朝無題詩』卷五・346)などと見え
る類い。

五十五 夢浮橋

幕下松明螢共照 幕下の松明 螢と共に照らかなり

見之旧好不能忘 之を見ては 旧好忘る能はず

横川路側浅々水 横川の路の側には 浅々たる水

青葉山辺寂々房 青葉の山の辺には 寂々たる房

入道姫君雖有思 入道の姫君 思ふこと有りとも雖も

出家功德定無量 出家の功德 定めて無量ならん

瓊篇都五十餘卷 瓊篇 都て五十餘巻も

至夢浮橋一部疆 夢の浮橋に至りて 一部疆まれり

(七律。忘・房・量・疆(下平声陽韻))

卷名は末句に詠込まれている。物語最終巻となり、薫が再登場。比叡山に登り、経や仏像の供養をさせて、横川の僧都を訪れ、小野の家の事を問い、自分が世話するはずの女(浮舟)が隠れ住み、受戒まで世話になったと述べた。僧都は合点すると共に事の始終を詳しく語り、薫もまた彼女との関わりを告げている。僧都は小野の山家への案内を請われたものの断わり、薫の供人小君(浮舟の異父弟)に浮舟宛書簡を託すのだった。帰洛後、薫はこの小君を使い立てる。小君を見た浮舟は懐しく往時を思い、母君のことをとても気にかけている。尼君は姉弟の対面を勧めるが、浮舟は人違いとして断って欲しいと願う。小君は薫からの手紙を届けるものの、浮舟は心を乱し苦しげに臥せるばかりである。姉の返事もその姿を見ることがもなく無念の思いで小君が帰参すると、薫もあれこれと思惑をえないのであった。以下聯毎に訳してみた。

近衛大将(薫)様の(一行の山に登られた帰途の)松明の灯火と(小野の山家の遣水の昔を思う慰めにもなる)螢が共に輝いておりましたのでございます。この光景を見て、(浮舟様は)昔のことをお忘れになることができませんでした。

横川への道の傍には、川の水が浅く速く流れておりました。そして、青葉の山に向かう小野の山里のほとりには、ひっそりとした住まいがあるのでございました。

仏の道に入られた姫君(浮舟)様には様々に物思うことがございますが、御出家なさいました功德はきつと無量のものがございましょうね。

すばらしい作品、すべて五十餘巻も、この夢の浮橋の巻に至り、一つの物語の終わりとなるのでございます。

首・領聯は、薫が叡山に登り僧都と語らった後、下山する帰途の光景を記す場面と関わる。

小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、紛るることなく、遣水の螢ばかりを昔おほゆる慰めにてながめたまへるに、例の、遙かに見やらるる谷の軒端より、前駆心ことに追ひて、いと多うともしたる灯ののどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出でゐたり。(⑥382頁13行〜383頁3行)

月日の過ぎゆくままに、昔のこゝの思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はでゐたり。横川に通ふ人のみなん、このわたりには近きたよりなりける。(⑥383頁10〜13行)

「浅々水」は物語文中には見えないが、あたりを流れる高野川(「手習」巻の詩参照)とみて良からう。「寂々房」は「そのわたりには、ただ近きころほひまで、人多う住みはべりけるを、今は、いとかすかにこそなりゆくめれ」(⑥374頁5〜6行)ともあり、先の引用文中にも見えたように、横川に往来する人だけが意識するところに過ぎない山里

の家（尼君や浮舟が住む）を指している。「幕下」は幕府の下の意。幕府とは近衛大将の唐名（『職原鈔』下）であり、ここでは近衛大将の薫を指す。「松明」は「唐式云、每城油一斗、松明十斤（今案、松明者今之統松乎）」（『和名鈔』卷一）、「松明（タヒマツ）」統松（同。俗用レ之）（『色葉字類抄』）などに見える。「浅々」は（浅瀬の）水流の速やかに流れる様子。「石瀬兮浅々」（『楚辞』）「湘君」『文選』卷三二）と見え、王逸注に「浅々、流疾貌」とある。「寂々」は物さびしく、ひっそりとした様子。「西軒草」詔暇、松竹深寂々」（『禁中寓直夢遊』仙遊寺）「白氏文集」卷五）「秋山寂々葉零々、麋鹿鳴音数更聆」（『新撰万葉集』卷上・秋歌『新撰朗詠集』卷上・鹿315）はその語例。

頸聯第六句は、僧都が小君に託した浮舟宛の手紙の中に見えることば、

もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかきこえたまひて、
 一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへと
 なん。
 （⑥387頁4～6行）

をふまえるもの。第五句は、浮舟が小君を見て、母を尋ねてみたいと思いつつもできず、尼姿になったからには、不用意に弟にも会えないなどと、揺れ動く心を見せている様を背景にしていると思われる。「二十身出家、四心離塵」（題「贈定観上人」）『白氏文集』卷九）は「出家」（仏門に入ること）の一例。「功德」は善行をなすこと、また、その結果としての御仏のめぐみ。「百千万劫菩提種、八十三年功德林」（題僧五首（鉢塔院如大師））『白氏文集』卷五七）『和漢朗詠集』卷下・仏事589）「何啻孤峰寒更暖、所生功德万民承」（『感雪朝』）『菅家文草』卷五）などがある。「無量」ははかり知れない意。「具無量功德」、「能救護一切」（『法華経』化城喻品）「是施主、但施衆生一切樂具、功德無量」（同上、随喜功德品）等、二語とも『法華経』頻出語彙であること言うまでもあるまい。

尾聯は大尾のことば。「瓊篇」はすばらしい作品のこと（瓊は美玉）。「素絨著丹字」、中有「瓊瑤篇」（『酬呉七見』寄）『白氏文集』卷六）に同じく、「瓊篇尋我曉凌寒、暫耽報詞日已闌」（具平親王）「戸部尚書重賦丹字見贈妙詞」：『本朝麗藻』卷下）と詠まれている。「一部」はここでは書物の一組、一揃えの意。「頃年以累代侍読の苗胤、以尚書一部十三卷毛詩一部二十卷文選一部六十卷及礼記文集一部」聖主御読……」（『江吏部集』卷中の詩題より）などと見える例参照。

五十六 賦 物語作者紫式部

智女越州循吏女 智女は越州循吏の女
 椒園芳績更非仇 椒園の芳績 更に仇きに非ず
 浅香山井藻詞勝 浅香山井の藻詞勝る

或説曰、依作源氏物語芳紫卷一、号紫式部云々。彼巻歌中、有浅香山井之篇。以采女詠為本歌。且如古今并新古今序者。彼采女一首者、為和歌之大体之由所見也。式部依酌山井之流、専染邦国之風。豈不感乎。

故有此興。

武蔵野原草号嚴 武蔵野の原の草名嚴し
 蔡琰文章無混俗 蔡琰が文章 俗に混じること無し
 恵班書紀争称凡 恵班が書紀 争でか凡を称せん
 二女才行、見後漢書。
 彼皆漢室此和国 彼れらは皆漢室 此れは和国なるも
 筆海艤舟共举帆 筆海に舟を艤ひて共に帆を挙げ
 〈七律。侃・嚴・凡・帆（下平声嚴韻）。猶「争」は仄声字の「豈」あたりでありたい〉

本物語詩の末尾に、作者紫式部を称賛する詩を付したもので、通釈は以下の通りである。

（この物語を書いた）賢い女性は越前の良吏（越前守藤原為時）

の娘でございます。後宮にお仕えいたしました業績もさらに軽いものではございません。(彼女が詠んだ)「浅香山あさくも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ」の歌は歌としてとても勝れたものでございます。

〔注記部分の訳〕ある人の説によりますと、源氏物語の若紫の巻を執筆しましたことで、紫式部と呼ばれるようになったとか、申します。その(若紫の)巻の歌の中に「浅香：山の井」の歌がございますが、これは采女の「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが念はなく」(『万葉集』3807)の歌を本歌として作られたものがございます。かつ『古今集』や『新古今集』の序では、かの采女の一首が和歌の大いなる手本となるものであると見えております。紫式部はその山の井の歌の流れを汲むことによりまして、もっぱらわが国の風雅に心を染められたものがございます。ですから、どうして感動せずにおれましょう。そんなわけで、このような心持ちの句となつた次第でございます。

(また)武蔵野の野原の草(の歌「紫のひととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」『古今集』867)の名(に通うの)も美しいではございませんか。

(後漢の)蔡琰女史の成した「悲憤詩二首」「古箏十八拍」といつたすぐれた作品は世に埋れることなく伝えられております。また、班昭女史は(兄班固の後を受け)漢書(の表と天文志)を執筆されまして、とても平凡とは言い難く称えられずにはおれません。

蔡琰・班昭の二女の才能とその行いは、『後漢書』に見えております。

彼女達は(後)漢の方々ですが、こちらの方(紫式部)は(わが)日本の方で、文筆の海原(という世界)に舟を仕立てて、共に帆を高々と掲げておられる方ということになります。

「智女」は知恵のある女性。智者でも良いのだが、女史形管(女性の執筆者)の身を強調する。「越州循吏」は越前・越後守となつた藤原為時(？一〇一八？)を指すこと言うまでもない。彼が申文の「除目春朝、蒼天在眼云々」の佳句をもつて主上を感涙させ、越前守に任じられたことは『続本朝往生伝』(一条天皇)『今昔物語集』(巻二四)『古事談』(第二)『今鏡』(巻九)『十訓抄』(第一〇)などの説話でよく知られている。また、本書「賦光源氏物語詩」が作られた頃を少し遡る頃には成立していたとされる『中古歌仙三十六人伝』(紫式部)には、「越後守為時女。名紫式部有二説。一者、作源氏物語之時、所載件紫之卷甚深作之。故得此名。一者、一条院御乳母子也。而上東門院令奉給トテ、吾ユカリノ者也。アハレト思食ト令申給之故、彼此名武蔵野ノ義也云々」とある(猶、この記述は第三句付注や第四句とも関わる内容となっている)。「循吏」は法にのっとりよく民を治める良吏(良い役人)。「慎択循良吏、令其長子孫」(「贈友五首」其四「白氏文集」巻二)「循良吏、著作郎、万代賢名遠近揚」(藤原敦光「秋日於河陽旅宿」)『本朝続文粹』巻二)に同じ。『史記』『漢書』『後漢書』等史書の列伝には循吏伝が立てられており、「詳循吏対策」(『本朝文粹』巻三所収の対策題)は例の一端。「椒園」は後宮のこと。椒閣・椒屋・椒房・椒殼なども。山椒は暖気を保ち、芳香を添え、悪気を除くとされ、その居室の壁に塗り込まれたことから言う(『芸文類聚』巻一五・后妃に引く『応劭漢官儀』など参照)。また、紫式部が中宮彰子に仕えたことはよく知られ、その詳細な一端は『紫式部日記』に窺われる。「勞績」はその宮仕えの実績を言う。「計勞績」而後進「爵秩」(「翰林待詔李景亮授左司禦率府長史依前待詔制」『白氏文集』巻三四)「篤茂、任寮之後、十箇年矣。忠貞不怠、勞績已深」(藤原篤茂「請被下殊蒙三天恩」拜中)大内記紀伊輔木工頭源方光申「他官所并淡路国守欠」状『本朝文粹』巻六・156)と見える。「仇」は一般的には殆ど用いられないことない字

だが、「輕。又字劍反」(『王仁昫刊謬補欠切韻』卷三)「相輕、謂_レ之_レ_レ。方言、接劍反」(『斐務齊正字本刊謬補欠切韻』「侃(カロシ)」「童蒙頌韻」)とあり、軽い意。「藻詞」は詞藻(音)に同じく、詩歌のこと。「旧譜遺_レ家華髮少、新詩遇_レ境藻詞聲」(菅原資忠「尚齒會後菅閣書尚歎_レ不_レ逢_レ彼會……」)「粟田左府尚齒會詩」「雖_レ飾_レ詞藻_レ、豈動_レ心根」(菅原文時「答_レ貞信公辭_レ闕白_レ表_レ勅」)「本朝文粹」卷二・52)はその例。「蔡琰」は後漢の女流詩人で、蔡邕の娘。音楽にもすぐれた才を発揮したことも知られる。字は文姬。夫に死別後、興平年間の天下大乱で胡騎に捕えられ、匈奴に在ること十二年、二子を生む。後、曹操が蔡邕の後嗣無きを痛み、匈奴に使いを遣って購い、救出されて、董祀に嫁いだ。その混乱の時代を体験したことを追懐悲憤して作ったのが「悲憤詩二首」「胡笳十八拍」と伝えられる。「文章」は詩文。「世間富貴心_レ無_レ分、身後文章_レ合_レ有_レ名」(編_レ集拙詩_レ成一十五卷……)「白氏文集」卷一六)「案牘初慙從_レ政理、風雲暫謝屬_レ文章」(「拜_レ戸部侍郎_レ聊書_レ所懷呈_レ田外史」)「菅家文章」卷一)などは殊に漢詩を指す。「恵班」は班昭の字。後漢の班彪の娘で、班固の妹。和帝の命により、兄の「漢書」の未完部分(八表・天文志)を補い成し、『女誡』の著書もある。曹世叔に嫁すも早くに未亡人となり、宮中にしばしば招かれ皇后や貴人の師となり、「曹大家」とも称された。猶、以上の二人のことは『後漢書』(卷八四・列女伝第七四)「扶風曹世叔妻」「陳留董祀妻」に見えている。「筆海」は文筆(学問)の世界、詩文の世界の意。「請振_レ詞鋒_レ、用開_レ筆海_レ」(駱賓王「秋日於_レ長王宅_レ宴_レ新羅客」)「懷風藻」)「筆海之浪、遂_レ日競起、詞林之花、随_レ春交開」(大江以言「松竹策文」)「本朝文粹」卷三・87)はその語例。「艤舟」は舟を出す準備をすること。「烏江亭長艤_レ舟待」(『史記』項羽本紀)「文峯案_レ響日駒景、詞海艤_レ舟紅葉声」(大江以言「秋末_レ出_レ詩境」)「和漢朗詠集」卷上・九月尺276)などと見

える。「挙帆」は帆を高く揚げ舟を出す意。文筆の世界に進み出る、存在を示すということの比喩である。

五十七 補説一

さて、本書には冒頭に序文(正応四年(一一二九)八月付)が付されている。その行届いた注釈が既になされているので、今それを参考にしつつ、その試訳を掲げておきたい。

そもそも『光源氏物語』は本朝神秘の書で人智でははかり知れぬ程の書である。見識浅く狭い者は、この作品を遊戯的なもてあそび物だとし、物事を深く考える好学の徒は、真心のこもった教えの依りどころとなるものだとするのである。本書は神代の事から人代の事に及ぶまで載せ記している点では、舍人親王の優れた書『日本書紀』に比肩しうるものであり、また、多くの人々の書物の記事を集め収めて、独自の書を編修している点では、司馬遷の実録『史記』に並ぶものと言えよう。一体誰が花鳥の使い(男女の間をとりもつ使い)の書などと言うのか。本書は和漢の『書紀』や『史記』に通うものなのである。

この物語の内容は、仁徳ある天皇四代(桐壺・朱雀・冷泉・今上)が皇位を継承し、その広大な慈愛が遍くゆきわたり、三公はじめすべての官人が感化されて敬仰し、水魚の交わりを結ぶことの深さを物語っている。ある時は、後宮の奥深き帳(とまり)に立入って密やかな契りを結ぶというように、あの『伊勢物語』で在原業平が美人に耽溺する様に似せてみたり(光源氏と藤壺の関係を暗示)、またある時は賤しい身分の出ながら貴人の良き伴侶となるという、あの『交野少将』に見える少女の栄華を表現しているかの様(明石の君を暗示)なのである。おおよそ、皇太子がその地位を輝かせ、摂関家が朝廷の重要な職務をおさめてまとめ、後宮の薄絹を纏う佳人や、天下を治め守る堅固な

基となる貴顕の嫡子達の様子が描かれているが、これはかしこき御代の帝の治政の模範として追い求め、帝の左右に在る記録官（史官）としても記さずにはおれぬことなのである。

まして、政事の道理を論じて、三綱五常（君臣・父子・夫婦の道と仁義礼智信を指す。儒教的倫理を云う）の道徳をおさめ正し、狩に言及して大原の小塩山に出遊され、靈妙なる御神を敬いて斎宮齋院をお定め申すべく議し、御仏に帰依して顕密（顕教・密教は対となる概念だが、ここでは広く御仏の教えという程の意であろう）の奥深い趣を示すとなれば猶更のことである。どうして帝は、ただ宮中遊宴のうるわしき春花・秋月の庭に美しい帳を掲げて宴を賜り、離宮・別邸の美しい泉や石畳みに御車をめぐらし楽しまれるのみであろうか、そうではないのだ。

あの須磨や明石の海辺で光源氏は不遇の身を嘆き吟じたものであったが、太上天皇に准ずる尊い位にまで昇ることとなり、葵の上や紫の上の死に際しては、独り世に残される道理を示すに至っているが、このように世の中に在っては禍福に定めなく、天から与えられた運命もはかない胡蝶の夢のようなものとして身を任せ、人としての哀楽も変わり易く、露の如きはかない命を芒山の秋に傷む他ないのである。

そもそも、光源氏には家督を継ぐ愛児（夕霧）があり、大学寮の学生として身を列ねていた。夜も学問に倦むことなく、華やかな灯火ならぬ雪明りの下で勤み、繰返し習い修めて怠りなく、螢火を集めて、美しい学びの場である筈を照らすという程であった。そして、遂に省試に准ずる帝前の放鳥試に詩を奉り、竜門に昇るの通り合格し、拘われることなく才能を発揮して侍従に任じられ、帝に忠節を尽くして、朝廷に飛ぶ鳥の勢いで栄達し、その名声は世上の遠くまで聞こえることとなったのであった。

学問を好み父に仕えるのは孝の始めである。貴い身分の生まれで右大臣の地位に昇る。その間、朝廷の政務を助けて、夕霧の名を称揚さ

れ、明君の時世に逢い天下の政事をやわらげ治めたのだった。文を以て世を治むという、その意味はここに明らかで、本書の要点はただこのことに在るのである。

ああ、あの左思「三都賦」では東吳王の王孫や西蜀の公子、（それに魏国先生）といった虚構の人物を仮り、各々のお国自慢を事実にして鮮やかに表現していたことだった。また、『法華経』では、さる長者の子供達を危難から救い、或は、導師が遠く険しい道途を力づけた故事のあることを思えば、仏教の譬喩をもって人々に譬をもたらす教化は高くすぐれたものと知られよう。そこで、儒林の風雅な言葉を用いるのみならず、靈鷲山の世尊の教え（『法華経』）にも依り、意味や詞章は内外の典籍を貫き、古今の書物を十分心得ている、この『光源氏物語』という著作の趣はそのようなものなのだ。

私は暇な時にこの物語を披見し、様々な感慨を催し、その旨趣を詩に賦してみた。五十四巻の一卷も残すことなく詠じ、三十二韻の押韻体系の一韻も漏らすことなく用いた。加えて、末尾に六義（巻毎に詠んだ詩そのもの）とは離れたものとなるが、物語の素晴らしさを称美せんとする気持ち抑え難く、にわかには作者紫式部の品行をも賦した次第である。但し、愚昧な小生の性分は変わらず、ただただ白太保（居易）の昔の詩の詠みぶりとかけ離れたものとなり、また、『毛詩』の周頌（周室の功德を称賛する祭祀の楽歌）のように熟し親しめる格調のものとは言い難い作ばかりで、作者紫式部の著した物語をもてあそんでいることを心に慙ち入るばかりである。これは、『莊子』に云うところの井中の蛙の智は海鼈を知ることなく、宋玉「対楚王問」や『莊子』などに見えるように、垣根に住む鵲の楽しみは雲遙かに飛翔する鵬を羨むこともないと言ふ喩えの如く、己の見識の狭さを指して言うものである。かくの如くありのままに記しておく。時に正応の御代の四年、自然の秩序正しく冷やかな時を迎えた八月に、以上のように序を認める。

この序につき、これ迄の『源氏物語』の研究者がどのように理解してきたかという点については後藤昭雄論文(注(1)参照)に詳しいので、ここでは触れない。ただ、序に「三十二韻、無_レ漏_二韻_一」(三十二韻のうちの一韻も漏らすことなく用いて詩を賦したということ)とある部分につき少し付言しておきたい。これについても後藤論文に「『童蒙頌韻』の韻の体系に拠っている」と指摘されている通りであるが、また更に後の『文鳳抄』(巻十・略韻)の記述とも一致することを付言しておかねばなるまい。

ここでは、更にそのことを基に少し広げて考えてみたい。猶、後藤論文では煩雑を避け省略しているが、本作品の桐壺巻から最後の作者紫式部迄の賦詩の押韻をまとめると下記の如くである(写本にも「目錄」として付されている。猶、本注釈の旧稿には若干の校正ミスがあるが、それを改めた上で挙げていく)。

挙げられた韻目の順序は、後の『広韻』や所謂平水韻とは異なり、『切韻』に依るものであることは、唐代写本の『王仁昫刊謬補欠切韻』と照合すれば明らかである。『切韻』では上平声二十六韻・下平声二十八韻(計五十四韻目)に分かれて文字が所収されているが、『童蒙頌韻』では通押(『広韻』で云う「同用」)もあって、平声上下各々十六韻(計三十二韻)に統合されているということになる。これについては、早く小川環樹『唐詩概説』(岩波書店、中国詩人選集別巻、昭和33年初刊)157頁注に次のように記されている(一部抄出)。

注1 広韻その他宋代以後に刊行された韻書ではすべて平声(上)五支六脂七之(上・去声もこれに準ずる)の三韻を通用とし、従って平水韻でも一韻にまとめる。しかし、わが国の「童蒙頌韻」(天仁二年一一〇一編集、群書類従本)によると、五支(四紙・五眞)が独用で、六脂七之を同用とする。これは恐らく唐代の規定を伝えたものであろう。

注2 二十一欣の韻の名は唐代の末まで殷であった。欣と改めたの

山剛	桓寒	痕魂元	殷文	臻諄真	哈灰	皆佳	齐	模虞	魚微	之脂	支	江	鐘冬	東	韻目	
関屋(関・間・山・還)	若菜下(冠・闌・残・干)	野分(端・寒・難・看)	蓬生(園・門・繁・言) 寄生(番・魂・恩・根)	御法(芬・君・文・雲)	筓木(新・身・臣・倫) 葵(神・辰・塵・勻) 初音(均・晨・春・茵・親) 蛭(陳・人・因・頻)	花宴(陪・才・催・推) 常夏(開・台・盃・哉・材) 鈴虫(財・胎)	手習(排・涯・埋・懷)	玉鬘(樓・西・溪・妻)	椀柱(凶・吾・殊・途)	紅梅(機・闌・婦・輝) 虚蟬(居・虚・餘・諸)	松風(滋・司・尼・時・詩) 浮舟(危・奇・崎・宜)	薄雲(誰・悲・遣・詞) 未通女(遲・思・姿・姬)	溼標(邦・降・江・双)	柏木(封・松・蹤・重)	若紫(僮・宮・夢・櫛) 末摘花(功・通・忽・紅) 紅葉賀(忠・風・中・躬) 絵合(雄・翁・同・終)	卷名(押韻字)

〔上平声〕

凡巖	銜咸	登蒸	添塩	侵	幽侯尤	青	清耕庚	唐陽	談覃	麻	歌	豪	肴	宵蕭	仙先
作者紫式部(仇・巖・凡・帆)	東屋(苒・巖・衫・緘)	橋姫(澄・朋・僧・昇)	篝火(兼・炎・添・厭)	夕顔(臨・碓・禁・吟) 花散里(琴・音・今・襟) 權(任・深・心・淫)	句兵部卿宮(伴・秋・求・由)	阪厓(流・幽・遊・憂)	桐壺(明・程・情・成) 夕霧(声・鳴・名・生)	御幸(皇・場・箱・觴) 蘭(望・商・霜・遑)	早蕨(覃・談・嵐・甘)	藤裏葉(霞・花・加・斜)	神(多・和・何・磨) 蜻蛉(他・波・河・過)	椎本(濤・皐・毫・勞)	総角(肴・交・梢・抛)	若菜上(朝・嬌・猫・飄) 横笛(焦・調・条・招)	明石(樺・船・裡・然) 竹川(絃・筵・裡・川)

〔下平声〕

は、殷の字が宋の皇帝の先祖の諱であるのを避けた結果である。この二十一欣も……唐代では独用であり、二十文の韻を通用しなかつたらしい。

注4 平声二十四塩以下は平水韻では二つにまとめるが、「童蒙頌韻」では塩添・咸銜・嚴凡の三つとする。下平声は十六韻になるわけである。これも古い伝承であるらしい。室町時代の「聚分韻略」でもこの点は古い形をのこしている。

この中には『童蒙頌韻』と異なるところ(欣は文と通用しなかつたらしいと小川は記す)もあつて、当時の中国の韻書の研究者にその根拠を改めて確認せねばならないところだが、この『童蒙頌韻』の韻体系が日本独自のものであるなどということはとても考えられない。むしろこれ自体が唐代の押韻体系を反映したものと考えるべきで、唐代の通押体系が本朝に残っていたと解釈すべきであろう。

ところで、『童蒙頌韻』や『文鳳抄』(巻十・略韻)が平声字のみ提示するにとどまり、所謂仄声字(上声・去声・入声。まとめて本朝では他声と呼ぶのが一般)を採挙げないのは何故か。一見不十分な韻書としか思われかねないかもしれないが、この方法こそ本朝人にとっては実に効率的な簡にして要を得たものであつたのだ。つまり、この在り方は、平声字(『童蒙頌韻』序では「凡二千九百五十五言、除_二重点三十七字_一とある)を覚えさえすれば、それ以外はすべて仄声字であるから、詩を作るに困ることはない、ということに他ならない(『童蒙頌韻』自体平声字を口ずさんで覚えるテキストであつた)。平安朝漢詩は中国詩の世界とは異なり、基本的に平声押韻詩であり、仄声押韻詩を作ること自体念頭になかつたからと考えられる(現存のものを検しても仄韻詩はない、仮にあつたとしても極めて稀なものと言ふべきである)。こうした本朝人にとっては極めて現実的な対応から先の二書のような提示の在り方が生じていると考えられる。

猶、本作品について、付足になるが、注目しておきたいことがもう

一つある。先の韻字表を見ればわかる様に、同韻目の中の使用文字も殆ど重複を避けており、ただ一ヶ処だけ胡蝶巻と幻巻の「形」(今のところ異同はないようだ)が二度用いられているのみである。稿者としてはそれが惜しまれてならない。実は胡蝶巻の末句「黄色衣軽宛転形」は「黄色衣軽宛転_二」でも良かったのではないかという思いが残るからである。もし、そうであつたなら、三十二韻すべて用いて作つたという他に、同韻目押韻の詩を多く賦しているにも関わらず、押韻に同じ文字を重複して用いることを避ける試みも行ったと言えたのではないかと思われてならないのである。

五十八 補説二

次に本作品の性格を論じたもので触れておかねばならぬのは小野泰次氏の論である。その骨子は次のようである。

一 巻名を詩句に詠込むのは、句題詩・題詠詩の手法や和歌の結題と関係するだろう。

二 対句表現や典故を意識しているものの律詩の形式としては完全ではない。

三 その表現は『和漢朗詠集』『白氏文集』『新古今集』等の初歩的な詩学に基づくが『源氏物語』の古注釈とも通底し、その知識と同様の意識によつて構成され、「光源氏物語」という巻名も当時の古注釈の概念で、極論すれば古注釈の本文を読むだけで詩が作られてしまうところがある。

四 作者は尾州家河内本系統の『源氏物語』を利用し、河内家の源氏学に関わりのある人物で、『蒙求和歌』『百詠和歌』『楽府和歌』の著述(源光行)の機運とも重なるもの。また、仏教的視点より儒者の視点に立ち、『紫明抄』に近い河内源氏学を踏襲した関東の人物で、武家か官人だろうと推測される。

一読戴けば理解されると思うが、実に行届いた論証と言ふべきであら

う。

思うに、この作品の賦詩は、基本的には物語の粗筋を詠むという傾向にある。物語の展開を作者なりに漢詩化した、と言っても良い。その中に巻名が詠込まれているのは、巻名となる和歌の存在を象徴するものと稿者は考える。物語の展開の中に巻名となる和歌が詠まれていることを、そのまま詩の句中に指し示したものと考えるわけである。したがって句題詩とは関係ないのではないかと思う。七律という形式は確かに句題詩の形式ではあるが、実は無題詩でも採られる形式であり、例えば『本朝無題詩』でも七割以上の作品がその形式に依っている。要するに平安時代にあつては、七律はごく一般的な形式だったものと思う。もつとも、小野氏の指摘するように対句の不完全なものも存するが、序文にも記しているように作者の表現力の限界であつたと言ふべきであろうか。

さて、これ迄の拙い施注で了解されるように、作者の表現(故事・語彙・措辞)手法は院政期頃の漢詩人の範疇を出るものではないと思われる(もつとも『源氏』の古注『紫明抄』や『河海抄』の漢学関係の記事自体が、殆どこの範疇に入るだろう)。小野氏は極論として、古注釈の本文を読むだけで詩が作れてしまふと指摘するが、必ずしも全巻の賦詩がそうであるとは言えないと思う。先述した様に、本詩群はストーリーを略述することを基本としていて、作者の見解を詠むことは余り多くない。まず作品の展開が作者の脳裏に入力されて賦されているから、本文に付された注と重なることには何の不思議もないと稿者には思われる。むしろ、例えば光源氏の誕生を(格別珍しい表現ではないが)「桑弧祥顛承恩後」(桐壺)などと表現するように、古注には見えない作者自身の工夫も随処に見られるように思うが、どうであろうか。

だが、小野氏の論は基本的に首肯すべきものと思われるので、是非読まれんことを期待したい。

〔注〕

- (1) 後藤昭雄「賦光源氏物語詩序」(『平安朝漢文学史論考』勉誠出版、二〇一二年)に詳しく、他に長瀬由美「賦光源氏物語詩序」(『源氏物語と仏教仏典・故事・儀礼』青簡舎、二〇〇九年)もあり、学恩を被った。
- (2) 「賦光源氏物語詩の表現形成について」(『中央大学国文』51号、平成二十年)、『中世漢文学の形象』勉誠出版、二〇一一年、再録。

(了)

付記

本注解稿は、大学時代の恩師津本信博先生が「源氏物語の鑑賞と基礎知識 手習」(至文堂、平成十七年五月刊)を担当されたことと関わる。その折、先生は稿者に「源氏」について何か書くようにと、頻りに從慫下された。勿論稿者は全くの門外漢なので辞退し続けたのであつたが、結局は拒みきれず平成十六年の春休み頃に、「漢詩でよむ浮舟物語」などと題する駄文を手書き原稿でお送りした。しばらくすると、それを奥様がパソコンで入力されたということで、校正するよりに、と先生の御手紙と共に返送されて来たのにはとても恐縮した。そして、御手紙の中で、拙文のつまらなさには一切触れず、どうせなら「賦光源氏物語詩」を全部わかり易く注解してみたらどうでしょう、と書かれていて、それが実は本稿に取組む契機となった。学生時代、学部に着任された先生の最初のゼミ生で、進路のことで何かと心配して下さったことも想い出されて、稿を進めていたところ、それから程なく、何と先生は御定年を待たず急逝された。その時の驚きと悲嘆は忘れられない。今でも(サバティカルの時でいらっしやったのか)「京都にしばらく住みます」という御電話を頂戴した時のことが脳裏に甦る。すっかり遅くなってしまい、しかも拙い稿であるが、ここに謹んで本注解稿を亡き津本信博先生に捧げます。